

連続シリーズ

「脱原発・軍事化を考える」を終えて

不戦へのネットワークでは、「シリーズ 脱原発・軍事化を考える」と銘打って、3回の連続講演会をおこなってきました。1、東日本大震災と自衛隊・在日米軍（木元茂夫さん）2、「核II原子力」と安保体制（愛敬浩二さん）3、核エネルギーに依存しない社会を作るために（湯浅一郎さん）という方々にお話ししました。おおつかみで3回の講演内容を、個人の責任でまとめてみます。

平和運動を続けてきた私たちにとって3、4月以後の運動の状況を見ると、少し「？」という違和感を覚えることがあります。その一つ目は、米軍の「トモダチ作戦」にもなう、「米軍ありがとう」の論調、二つ目は、反原発・脱原発の声は大きくなりましたが、核や軍事に目がむかない。たとえば、中型原発に匹敵する原子炉をもつ

木元 茂夫さん



「空母ジョージ・ワシントン」の危険性などにはあまり目が向かないことなどです。これらは、私たちが、これからの平和運動を続ける上で考えないといけないこと

です。シリーズではそこに焦点をあてました。

「トモダチ作戦」については、私たちは、戦争展でもとりあげました。木元さんは「トモダチ作戦」の経過を詳細に説明されました。米軍は震災支援の活動の最中にも、模擬爆弾を使つての通常訓練を普段通り続けていたことを紹介されました。これは、人助けをやりつつ、殺傷する訓練もつづけているということですから。異様な光景ですが、やはり、軍隊なのです。

救援活動では自衛隊や米軍が活躍しました。災害救助・支援では、組織された力は必要でしょう。しかしそれは軍隊である必要はありません。こうした考えは、大変な心身の負担のなかですすめられた自衛隊員、米軍兵士の活動を貶めるものではありません。軍隊の本質の問題です。

よく、アメリカは戦略的にものを考える国、ということがいわれますが、2005年「日米同盟その未来と変革のための再編」以来、米軍の考え方は一貫しています。自衛隊を米軍の作戦に組み込む、そして、それは、アジア・太平洋地域、そして世界に展開するということです。ソマリア、そして南スーダンでの活動はまさにそうです。（しかし、憲法9条と、安保条約の範囲は極東、は今でも当然有効です。）「トモダチ作戦」自体は、これまでですすめられてきた日米の軍事的一体化の動きの一環でしかありません。作戦のなかでは、統一指揮所がもうけられ、自治体との連携もはかられています。その結果、米は、日米の軍事一体化の推進、思いやり予算、沖縄の海兵隊を使つての「融和」と多くの成果をえました。新たな日米同盟と

いう戦略目標にむけて、「トモダチ作戦」はクールに遂行されたのです。自衛隊員や米軍兵士の被災地への想いと、それへの被災地のひとたちの感謝の気持ちは、あたりまえの人間感情の発露であって、軍隊への評価とは別個のものと思います。被災地の感謝の気持ちは、沖縄での辺野古、高江での米軍基地建設推進という方向へとゆがめられてはなりません。私たちも、米軍にならって、クールに考えていかなければ、脱軍事化という課題にとりくめません。

木元さんはDVDをもって「これ、東京湾に浮かぶ原発・空母ジョージ・ワシントン」の危険性を訴えられました。（このなかは一つの町になっていて、5000人の人がくらしている。この町中に原発があるといえる。）原発はそもそも原潜の推進力として開発されたものの転用といわれます。

忌野清志郎さんは、「ラブ・ミー・テンダー」という替え歌について、あの歌は「反核の歌だ」、でも大騒ぎされて、「反原発の歌だとされてしまった」。「放射能はいらねえ」と歌っただけだ。それとも「原発の灰色のヴェールのなかでは核兵器がつくられているとでもいうのかな？」と皮肉って「歌っています。これは、核オプシオンというやつです。自民党の政調会長・石破さんは最近、「核の潜在的抑止力を持ち続けるためにも、原発を止めてはならない」と言っています。私たちが「脱原発」のデモをしているときに、私たちの行動に反対するグループの人たちは、「日本の核武装のために原発がある」と言ってきました。忌野清志郎さんの指摘のように、原発のなかではプルトニウムがつく

られます。日本の原発のなかでつくられて蓄えられたプルトニウムは45t、核兵器5600発分といわれます。これが、「潜在的抑止力」ということです。日本が核抑止力をもつことはできません。憲法があります。そして、アメリカにとめられています。安保体制です。だから「潜在的」となります。

これまで、核と原発はセットで開発されてきましたし、平和利用といいつつ、核兵器を開発した国もあります。技術的にも核分裂の利用ということでは同じです。(原爆は爆発させる技術が必要ですが。)日本政府は、蓄えられたプルトニウムはIAEAによってきびしく管理されているので核武装ということにはならない、としています。プルトニウムは資源の少ない日本にとっての貴重な燃料ということになっていきます。これが灰色のヴェールのなかみです

忌野さんの言うように「放射能はいらない。長生きしてえなあ。」ということであれば、原発も、空母も、核ミサイルも同じです。人類と核エネルギー・放射能は共存できないということで、脱原発と、核廃絶は同じように視野にはいつてくるはず。また、仮に(とてつもない仮にですが)、核兵器廃絶が実現しても、原発があるかぎり、平和利用であろうと、結果としては核兵器の材料となるプルトニウムができてしまっています。

現在、アメリカを中心にすすめられている、核の傘・抑止力による「平和」という考え方は、核不拡散と濃縮ウラン、プルトニウムの管理による原子力の平和利用という両輪で成り立つものです。(裏をかえせ



愛敬 浩二さん

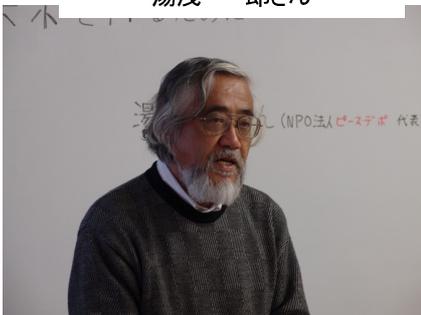
は、核独占・管理による脅しの体制です。(核兵器はもたないが、管理されたなかで、「平和利用」をすすめているという意味で、日本はこの体制の優等生と称しています。(余談ですが、グローバルイズムの深化のなかでは、核の抑止力という考え方そのものが有効性を失ってきているのではと思います。)

では原発と核兵器、原発と安保、核の傘をつなげたものとして、関連のなかで、同列に置いて考え、批判しなければならぬのだろうか？ この問題について「勉強中」としながらも提起していただいたのは愛敬さんです。

愛敬さんは、大前提として、核兵器開発と原子力の平和利用はきりはなすことができない、反原発運動と反核運動はむすびつかなければならぬ、としつつ、しかし、核と原発は同列には論じられないのではないかと。以下、正確には愛敬さんの言葉とは違うかもしれませんが、乱暴なまとめかもしれませんが、愛敬さんのあげた理由を列記してみます。

まず核兵器は絶対悪である。国際司法裁判所は核兵器の使用は原則として違法という勧告をしている。

湯浅 一郎さん



(確かに、昨年のNPT再検討会議でも合意文書で核の「非人道性」ということがうたわれていますし、世界的「合意」になりつつあります。) 平和利用は絶対悪となるだろうか？ 同列に論ずるとその意味がうすまってしまふ。そういう側面が強いが、54基と異常に増えたのは、電源3法に象徴される利益誘導政治によるところが多い。原子力の民事利用では、必ずしも対米従属とはいえなかった。反核と反原発の理由は異なっている。

そして、反安保、反核、反原発の基底にあるのは、平和的生存権の考え方である、愛敬さんはこう話しを結ばれました。

さて3回目の湯浅さんも、同じようにまとめてみます。今回の福島原発の事故を、福島事態と呼びたい、とし、その意味を、科学技術に依存した社会のありようを問い、核エネルギー開発という歴史的文脈で、政治、軍事、経済さまざまの視点で検証したい。

人類はせつせと毎日プルトニウムと死の灰(核分裂生成物)を作り続けるのか？と提起され、原発も核兵器も原理的には同じもの。死の灰をつくり出すという意味で同じものである。世界に500基ある原発から、そして再処理工場から、核実験(

れまで543回の大気核爆発があった)からの放射能がグローバルに拡散し、生活の場をうばっている。人類と核は共存できない。脱「核の傘」、脱核発電をめざそう。身の程をわきまえた社会、循環型社会をつくろう」と提起されました。

以上今回のシリーズの要旨を乱暴に補足もそえてまとめてみました。

愛敬さんは、実は、主催者(＝私たち)とは意見が異なるかもしれませんが、という提起をされました。それが先の「原発と核を同列には論じられないのではないか」との提起です。さて、私たち主催者をふくめて、意見の相違があるのかどうか? 答えは……、よくわかりません。すくなくとも深刻な相違点はないと思います。核と原発は、原理的には同じであり、同時に開発されてきた。という批判の出発点は同じ。原発運動と二反核運動の接続は必要という結論も同じ。しかし、運動・批判の過程は違つように思う。二つの運動はそれぞれ独自の課題があり、打ち出し方も違う。でも、あいいれないかと言えば、そんなことはないと思えます。

原発と核を関連つけて批判するとき、二つの視点があると思います。一つは、日本の場合、原発推進に核武装の意思あるいは隠れた意思があるかという視点、もう一つは、核であれ原発であれ、放射能と人類は共存できない、反放射能という意味で、核兵器も原発も同じという視点です。

前者について言つた、核武装への意思はあつた、

なかつた、石破さんがいうように、原発が存在するかぎり、核武装の可能性は潜在的にもつているという事です。しかし、問題は、日本が執拗に核燃料サイクルを追求していることへの疑念です。これは海外では「日本の核武装への意思」ととらえられています。NPT(核不拡散防止条約)体制のなかでは、日本は優等生といつかたちで、米の「核の抑止力」をささえつつ、みずからの潜在的な抑止力も保障されているということですが、しかし、具体的に日本で原発と核武装がつながっていることの証明は難しい。なにしろ潜在的ですから。

後者について言えば、長きにわたつて、核兵器は悪だが、平和利用はそうではないとする幻想が、平和運動にかつて存在したことへの反省がある。核と人間は共存できないとする宣言が絶対に必要であるという立場です。核の傘の非人道性を言うならば、原発も廃絶するべきということですが。放射能汚染源というところでは同じです。原爆と原発の事故との相違は、高温の爆風があるかの違いです。(原爆は瞬間的に1000万度の熱と、それにもなう爆風をもつ。爆発時に電磁波、分裂片からは放射線が襲つ。)私は、核と原発は関連つけて批判せねばならない、ということにはならないと思います。しかし、切り離せないということだと思えます。反放射能ということでは、まとめるのはどうでしょうか? 「放射能はいらない。牛乳飲みてえ。長生きしてえな。」(「ラブ・ミー。テンダー」)です。「平和的生存権」と言い換えられるのかもしれませんが。

しかし、現実問題としては、原発のことを考えていても、軍事のことは入ってきにくい。深刻な放射能汚染地域のことを考えているとき、「ジョージ・ワシントン」のことはすくにはつなげられないし、地域のなかで、原発を止めようといつのと、核の傘の非人道性の話は直には結びにくいかもしれない。同列に考えねばならない、とは思いません。それこそ反核と反原発の理由が一緒である必要はありません。でもつながっているという認識は重要だと思います。忌野清志郎さんではないが、「過剰反応」してくるのはむしろ核開発推進者のほうではないでしょうか。このことの意味は意外と大きいと思います。石破さんもそうだし。また、電力会社のパンフレットには必ず、原発と原発はちがいます、と必ず入っています。これは、原発企業は軍需企業でもあるから、うしろめたいのもかもしれない。結局、エネルギー開発のつもりでいても、やっていることは核兵器開発と変わらないというのが真実かも知れません。まさに不可分のものだから。

軍事のことも、放射能汚染にたいするのと同じように、日常の生活感としてとらえられるようになればいいのだけれども、こどもを放射能汚染から守る、と同じように、こどもを平和的な環境で育てたい、が生活感覚としてあたりまえとして言われるようになるといいなと思えます。

以上、講師のお話を聞いての感想を含めた、個人的なまとめとして読んでください。